

# 逃亡の間

asitaba@ねこ

—逃亡の間

俺がここに来たのはつい数分前。

見知らぬ誰かによる犯行でこの部屋に連れてこられた。

俺は今視界を奪われているため、ここがどんな場所なのか想像もつかない。

ただ足元がひんやりとして、他の三方は暖かいにも関わらず、前方からは冷たい空気が流れてきている。

そのことを踏まえると、ここは室内であろうと推測できる。

現時点で聞こえるものと言え、俺の動きに合わせて鳴る靴音くらいだ。

手足を拘束されているわけではないが、精神的な圧迫感により身動きを取る事が出来ないでいる。

とりあえずのどが渴いた。

「おい。」

後ろから声が聞こえる、これは返事をするべきか否か。

「俺だ、わかるか？」

俺の肩に手を乗せ、耳元でささやくかのように話しかけてくる。

俺だ、と言われてわかるようなら、今以前に聞こえてきた会話でほぼ特定出来ているだろう。

「答えろ、喋っていいぞ。それと緊張するな、リラックスしろ。」

リラックスしろと言われても、この状況じゃ誰もリラックスなんて出来まい。

しかし、このままでは俺の精神も持たない。

この状況を打破すべく、仕方なく彼女の問いに答えることにした。

「俺はお前を知らない。見たらわかるかもしれないが、声だけでは特定はできない。」

遠まわしに目隠しを外せと言ったのだが、わかってくれただろうか。

「これを外してほしいのだけれど、それは出来ない。」

理解はしてくれたが、残念ながら承諾は得られなかった。

「とりあえず話を聞け、いいな。」

俺は、彼女が肩から手を外すのと同時に、承諾の意を込めて頷いた。

「今外は大雨だ。計画どおりなら屋外で行うはずだったが、急きょここで行うことになった。」

彼女が言うとおりに、外では雷がゴロゴロと唸りをあげている。

まだ俺の登場する必要性が見えないが、これも何か意味があつてのことなのだろう。

「だが、ここでは俺の望むような結果が得られないのだ。そこでお前に用がある。」

そのまま待つように指示され、彼女はどこかへ歩いて行った。

そのまま、とは動くなと言う意味だろうか。

しかし、ずいぶん前からこの体勢でいることに飽きてきている。

彼女の戻ってこないことを確認すると、ゆっくり椅子から立ち上がり、軽く伸びをする要領で手を上に上げた。

案外、その手はガツンと天にぶつかった。

ふいに見上げるも、目隠しを外してもらわない限り何も見えない。

俺の視界をふさいでいるものはどうやら特別な仕様らしく、動かすことが出来なかった。

「お前の行動はすべてモニターに映っているからな。」

音もなく戻ってきた彼女に、それはぞっとすることを言われた。

「……見ていたのか。」

ありもしない余裕を見せつけるため、出来るだけクールに装う。

「まあ、いいだろう。」

次からはないぞ、と続けて彼女は俺の腕を掴み、強制的に歩かせた。

さっきまでの冷静な彼女はどこへやら、忙しく動き回りついていくのがやっとだ。

「……金か？金なら、いくらか出せるぞ。」

世間一般に言う金持ちだとかではないが貧乏とやらでもない。

ある程度の金を出して解放してくれるのならそのほうがいい。

「金なんかどうでもいい、今はお前がそこにいれば……。」

「……。」

愛の告白めいたことを言うものだから、さっきのとは違う緊張が走った。

最初の頃は凛々しくしていた彼女も時間の経った今では、素のかわいらしい部分が顔を出し始めたのかもしれない。

やはり同じ人間なんだとわかり、少しの間気持ち楽になった。

全身が冷気に包まれる感触。

どうやら屋外へと来たらしい。

「……ポリスだ。」

「何だって？」

隣にいる彼女は、不安ですと言わんばかりに体が震えていた。

「……大丈夫なのか？」

「何がだ。」

こんな中でもクールに装える彼女は本当にすごいと思う。

「捕まらない自信でもあるのか？」

「ああ、死ぬのをわかっているのに、こちらから出る馬鹿はいないだろう。」

これも想定範囲内というわけか。

「そろそろこれ取ってもらっていいかな。」  
一秒も経たない間にカチリと拳銃のスライドを引く音が聞こえた。  
「すまない、こう長い間見えていないと頭の回転速度も落ちるらしい。」  
言い訳も含めて謝罪を試みた。  
「……外してやる。だから一言でも喋るな。」  
ガチャンと後頭部の辺りから金属を外すような音が聞こえた。  
久しぶりに空気が触れた目に映ったのは、限りなく理想に近い女性だった。  
「ふーん……。」  
「何……そんなに見るな……。」  
「……。」  
今までに経験したことのない感情が渦巻く。  
きっとこれが一目ぼれと言うやつなのだろう。  
思い立ったら～な俺は、ついさっき言われたことさえ忘れ口説きにかかった。  
「……手、握ってなくていい？逃げちゃうよ。」  
そう言い彼女の手を俺の手に重ねる。  
ああ……と顔を赤らめている彼女は想像上の物だ。  
「うるさい！黙れ！」  
さすがにこれは予定外だったのか、先ほど以上にカリカリしだした。  
「喋るなと言っただろう！次勝手に喋ったりしたらお前の右腕が吹っ飛ぶぞ！」  
今の彼女は警戒態勢万全で俺の思いと反した行動をとる。  
「ああ、ああ、わかってるよ……。」  
それ故か否か、彼女自ら手を握ってきた。  
「……。」  
「握れと言っただのはお前だろう。」  
まさか受け入れてくれるとは思ってはいなかったから、心の準備がまだ……。  
「答えろ。」  
「そりゃ、まあ、そうだけど。」  
「……逃げるんじゃないぞ……。」  
頭に押し付けられているものは物騒極まりないが、悪い気はしなかった。

何時間かぶりの空だ。

俺が窓の外を覗き見していると、彼女が話しかけてきた。

「外が気になるのか。」

気になると言えば気になる。

そう言えば警察はどこへ行ったのだろうか。

「答えろ。」

「気になると言えば気になる。警察は何処かへ行ったのか？」

「どうやらそのようだ。」

それなら話は早い。

何も考えずとも出ていける。

「ならここから逃げよう。」

俺は彼女との逃亡を考えた。

「一緒にか？」

「そうだ、今なら誰も俺が君に誘拐されたなんて知らないだろう。」

少し口籠り彼女が言った。

「.....なぜだ。」

そんな問いに迷わずこう答える。

「もう少し君と一緒にいたい。」

早すぎたか、それきり彼女は口を閉ざした。

こちらから話しかけたいのだが、むやみに話しかけ撃たれてしまっはしょうがない。

ここはしばらくの間、最初の静けさを取り戻した。

「.....朝になる前にここを出る。」

一時間ほど経った頃だろうか。

彼女からこの一言が発された。

「俺も、お前と一緒にいたい、いいか。答えろ。」

数時間前とは別人のような柔らかい声で言う。

「ああ、いいとも。」

もちろん即答だった。

とっさに出た閃きのおかげで今回は無事に済んだ。  
外に出た瞬間、俺の言動は自由となった。  
それも、かわいいおまけつきだ。  
「拳銃は捨てていけ。指紋もついてなさそうだ。」  
「これに弾は入っていない、持っただけかな。いつでもお前をハチの巣にできる程度。」  
ツンデレか、それもいいな。  
今の彼女はどれも可愛く映る。  
「お願いだから冗談にしておいてくれ。」  
「せっかく手に入れた幸せだからか？お前は未使用機か？」  
彼女もまた緊張の糸が解けたようだ。  
「今の君のほうが俺は好きだ。」  
「そう好き好き言うものじゃない。マンネリ化の始まりだぞ。」  
「そうなのか？」  
こう他愛もない話で盛り上げられるなんて最初は思っていなかったな。  
増してや、彼女と一緒に逃亡するなんてことも。  
「どこに逃げようか。」  
「お前とならどこでもいい。」  
極度の緊張から解放された反動で、急激に食欲がわいてきた。  
余った時間で、デートでもするか。  
「そう言えば、門限は何時だ？」  
「馬鹿か、子供じゃないんだぞ。」  
彼女は隣で笑っている。  
どうやら、ボーイフレンドとして認めてもらえたみたいだ。